

No1 [2003] 大阪大学 [後期]

[要約]

クローニングとは、細胞分裂によって生物を複製することである。複製される生物のある細胞核が、細胞核を除去された未受精卵へと移される。このことが成功すると、誕生する生物は、もとの生物と同じ遺伝子構造を持つことになる。もしもクローニングによってただ一人の子孫を作ること考えるのなら、出てくる異議は一つだけで、それもいくぶん推論的なもののように思われる。また、現在我々が有する多様性の度合いには、遺伝学上の利点がある。非常に多種多様な遺伝子給源があることにより、我々のうちの一部が、死に至るある新型の病気の蔓延のような生物学的災害を切り抜けられる可能性がより高くなる。クローニングは我々の人間関係を変えてしまうと予想できるかもしれない。二人の人間の関係が、共有する経験や、互いに対する反応の歴史に依存する度合いのためである。ひょっとすると、クローニングは我々が最初に考えるほど人間関係を変えることはないかもしれない。クローニングがどれほど人間関係を変えるか、また結局いかなる変化が良い方や悪い方に向かうのかどうか推測するのは難しい。主な反対意見は、遺伝子給源を狭めてしまうこと、およびそれに伴う、不毛な画一性と関係がある。これらの反対意見はとても強いものなので、クローン人間集団のいかなる実質的な利用も、今は明らかでない、何らかの非常にさし迫った理由によってしか、正当化することはできないであろう。

